

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

B. 円滑な学位授与の促進

③論文作成支援の充実

《理工農系》

●早稲田大学先進理工学研究科生命理工学専攻

「超専攻型融合テーマスタディクラスター教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

論文の作成だけでなく、国際会議におけるプレゼンテーションに際し、専任の外国人教員によるチュートリアルを実施したが、正式に実際に利用した数件であった。しかし、この機会にアブストの作成とか、プレゼンの発表直前チェックなど、気軽に外国人教員とコンタクトが取れるようになり、学生は大いに満足していたが、担当の教員には相当な負担になっていたようである。

(苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

学生の事前準備に時間がかかり、結局、チュートリアルを受けている時間がなく、締め切りが迫る場合が多かった。また、学生への周知が十分でなかった。実際、個々の指導教員の指導で済ませる結果となった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

本教育プログラム開始の後に大学ですでに全学的なライティングセンターを設立している。論文等の指導が継続的に行われることになっており学生に周知させていきたい。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

①FD体制の整備充実

《理工農系》

●早稲田大学先進理工学研究科生命理工学専攻

「超専攻型融合テーマスタディクラスター教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

異分野融合プロジェクトをすすめるにあたり、従来型の個別専門教育から融合教育となるため、教員のFDが必要と考え、FD会議を開催した。実際にはこの新しい環境を提供された学生たちのほうが教員よりも考え方がフレキシブルとなった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

教員が多忙であり、新たなプログラムを実施することによる教員の負担が増えている。このことが教員の参加を妨げる場合があり、FDの会合開催も限られてきた。そして、ここに積極的に参加する教員の顔が限定されてきたが、やる気のある教員の熱意は逆に高まった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

授業期間を避けた合宿形式によるFD会議を実施した。ただし、意見が多く出たが、教育に関する方向性の結論はなく、教育プログラムを実施しながら、適宜対応することとなった。これは、異分野融合教育の必要性は感じているが、現場の教員の経験が十分ではなく、むしろやってみて初めてわかることもあるので、経験の蓄積、試行錯誤が重要になる。他大学の実施プログラムとの情報交換も有意義であると考えた。